



年頭のごあいさつ

社団法人北海道林産技術普及協会

会長 竹内 久 彌

平成7年の新春、明けましておめでとうございます。

会員の皆様には、ご家族ともどもご健勝で、新しい年をお迎えになったこととお慶び申し上げます。また今年こそは皆様にとって希望に満ちた年でありますように心からお祈りしております。

顧みますと、昨年は、一昨年にも増して木材・林産業界にとって極めて厳しい年でありました。建築着工数はますますだったものの、円高による丸太輸入、製品輸入は増加し、価格的にも国産材は競争力を失いつつあります。またバブルの崩壊による不況に追い討ちをかけるように価格破壊が進行し、経営環境を一層難しいものにしております。日本全体の景気はやや持ち直しの兆しが見えると伝えられるものの、木材・林産業界は置いてけぼりを食っているような気さえする一年でした。ことに国産材製品の価格は、輸入木製品の安値に引っ張られている上、プラスチック、金属製品など他の材料製品と競争しなければならない立場にあります。また外材の輸入増は、裏山資源の低質化、過積載規制の強化と共に、臨海工場と山元工場の格差を一層拡幅することになりました。

しかし、円高、市場解放、価格破壊などの影響で景気を落ち込んでいる業界は木材だけではありません。他の業界だって似たり寄ったりではないですか。みんな試行錯誤をしながら、厳しい経営環境の中で戦っています。マイナス面だけ強調しているだけではなにか一つ解決することはできません。一般論ですが、一つには消費者のニーズを的確に把握し、外材製品と競争できる低価格で質の良い製品を市場に出すことが求められています。「丸太を四角に挽くだけではやっていけなくなる」と言われ出したのは、もう10年も前の話です。今ほど、それが現実のものとして感じられる時代はありません。確かに構造材の多くは乾燥材に替わりました。しかし、今はもっと高次の加工が求められています。例えば建築材料から建築部材への脱皮があります。構造材のプレカットもそうですし、木製ドア・サッシもそうです。床や壁の部材化も夢ではないでしょう。もちろん変革することは、口で言うほど容易なことではないでしょう。でも今が踏ん張り所なのだと思います。私ども林産技術普及協会は、今年も、優れた木材加工の技術集団である林産試験場と木材業界のパイプ役として、技術的側面から精一杯支援して行きたいと思っております。

さて、林産技術普及協会は法人化されて満30年の記念すべき年を迎えました。協会の充実発展に尽くされた先輩各位、関係機関の方々にあらためて心から感謝を申し上げたいと思っております。特に林産試験場には運営全般に渡って惜しまざるご協力を賜り、おかげさまでこの30年間、事業量、事業内容、予算規模等みても大きな発展を遂げることができたと感謝しております。

平成7年の年頭にあたり、会員各位、木材・林産業界のますますのご活躍・ご繁栄を祈念して、新春のごあいさつとします。